

12日 火曜

ヘブル



7:11 民はレビ族の祭司職に基づいて律法を与えられました。もしその祭司職によって完全さに到達できたのなら、それ以上何の必要があって、アロンに倣ってではなく、メルキゼデクに倣ってと言われる、別の祭司が立てられたのでしょうか。

7:12 祭司職が変われば、必ず律法も変わらなければなりません。

7:13 私たちがこれまで語ってきた方は、祭壇に仕える者が出たことのない、別の部族に属しておられます。

7:14 私たちの主がユダ族から出られたことは明らかですが、この部族について、モーセは祭司に関することを何も述べていないのです。

7:15 もしメルキゼデクと同じような、別の祭司が立つなら、以上のことはますます明らかになります。

7:16 その祭司は、肉についての戒めである律法にはよらず、朽ちることのない、いのちの力によって祭司となったのです。

7:17 この方について、こう証しされています。「あなたは、メルキゼデクの例に倣い、とこしえに祭司である。」

7:18 一方で、前の戒めは、弱く無益なために廃止され、

7:19 ——律法は何も全うしなかったのです——もう一方では、もっとすぐれた希望が導き入れられました。これによって私たちは神に近づくのです。

7:20 また、神による誓いなしではありません。レビの子らの場合は、神による誓いなしに祭司となっていますが、

7:21 この方は、ご自分に対して言われた神の

誓いによって祭司とされました。「主は誓われた。思い直されることはない。『あなたはとこしえに祭司である。』」

7:22 その分、イエスは、もっとすぐれた契約の保証とされました。

律法とその命令による旧約の祭儀は、神の聖なることを表すためには、すばらしいものでした。そしてそれは来るべき永遠の祭司、真のとりなし手、完全なるいけにえであるところの御子イエス様を指し示すひな型です。つまりイエス様の御生涯と十字架を知るときに、初めて旧約の祭儀の意味がわかるということです。

しかしまた旧約の律法と祭儀があることによって、イエス様の十字架が単なる偶然や成り行きではなく、それが大いなる必然であったことがわかります。イエス様の十字架には重要な意味があったのです。その理解はまさにこのヘブル書によって確認され、深められます。

ひな型としての祭司はアロン系であって、それはレビ族から選ばれます。しかしイエス様は違うので、明らかに旧約に限定されないお方です。それは、「肉についての戒めである律法にはよらないで、朽ちることのない、いのちの力によって祭司となった」ということが明らかにされるためです。

確かに律法は罪を自覚させることはできましたが、救いのためには「何事も全うしなかった」のです。しかし自らをささげた永遠の大祭司イエス様は、救いを全うされました。そして「とこしえに祭司である。」ということは、その救いがとこしえに有効であるということです。

このように私たちのために与えられた救いが完全に備えられたものであることのゆえに、神をさがめ、感謝し、そして確信を強めましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

